音便形についての一考察

― 留学生日本語授業クラス分けテストをもとに ―

田 村 泰 男

はじめに

日本語を学習する外国人にとって動詞を正しく活用させるということは，数ある文法項目の中でも難しい問題の一つである。このことは，テスト等に現れる誤用・誤答の多さが物語っており，それゆえ日本語教育の現場にいる者にとっても一層興味深くまた真剣に取り組まなければならない問題となっている。

動詞の活用の中でも特に誤用（誤答）が目立つものに，五段動詞の連用形，すなわち音便の問題がある。しかしながら実際，どのレベルで，どのような誤用（誤答）が現れているのかは，はっきりわかっていない。また，その誤用（誤答）が音韻規則の適用を誤ったために起こったものなのか，あるいは他の要因によって引き起こされたものなのかという問題も残されている。

そこで本稿においては，特に音便形の問題に焦点を当てて，実際の誤答例をもとに分析を進めていこうと思う。

1. 資　料

資料としては，某国立大学で新規来学の留学生を対象に毎年2回（4月，10月）行っている日本語授業のクラス分けテストのうち，過去3年間のテスト結果を用いる。（テストの全体像については，上原・難波（1988）[1] を参照のこと）

このテストでは，動詞の辞書形を与え，文中の空欄に活用させて入れるという形で動詞の活用を問う問題が15問出題されている。例えば，次のような問題を考えていただきたい。

（くる）　かれは，きょう（　　）ないでしょう。

この15問をそれぞれが属する動詞グループ，問われている活用形ごとに分類すると次のようになる。

＜動詞グループ＞

五段活用動詞	9問	上一段活用動詞	2問
カ行変格活用動詞	2問	サ行変格活用動詞	2問

＜活用形＞

連用形　9問　　未然形　5問　　仮定形　1問

上記のことからわかるように，動詞グループ・活用形の間で問題数に偏りが見られるが，これは，実際に日本語を使っていく上で問題となると思われるところを中心に出題されているからである。

このうち，本稿で扱う音便形については，次の6問の出題があり，て／で形またはた／だ形を問う問題である。[2]

促音便	すう→（すっ）て	イ音便	ぬぐ→（ぬい）で
	きる→（きっ）て		かく→（かい）た
	ふる→（ふっ）て	撥音便	よむ→（よん）だ

音便形が現れるケースとしては上記以外に，撥音便の－n動詞（死ぬ），－b動詞（遊ぶ），促音便の－t動詞（待つ），行く，の4つが考えられるが，今回は資料の不足からこれらについては扱わないことにする。

次に動詞活用の問題における得点分布を見てみよう。総受験者306名中，全問白紙解答の35名を除いた271名を今回の分析の対象にするわけであるが，その得点別の人数を表したものが表1である。

（表1）

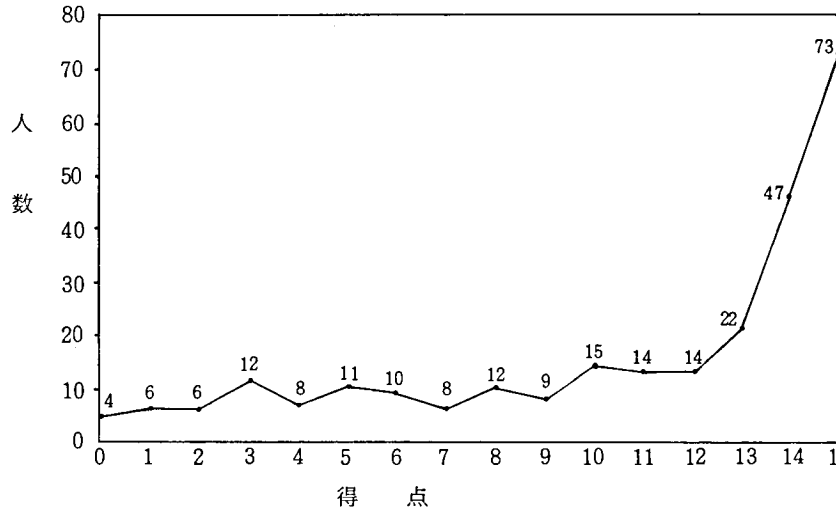


表1から明らかなように，受験者の半数近く（52.4％）が13～15点レベルに位置しており，残りは多少の起伏はあるものの0～12点にほぼ同数で分布している。以下，表1の結果を参考にしながら分析を進めていく。

2. 誤用分析

2. 1 促音便

まずはじめに，資料から得られた<すう><きる><ふる>の誤答例を表1であげた受験者の得点に応じて表にしてみることにする。（ φは白紙解答を示す）

<すう>　（表2）

	すい	し	すさ	すわっ	すて	すん	すわ	すう	すり	すって	す	すろ	する	すく	う	すえ	φ	合計
14	2																	2
13	3	1																4
12	1		1	1														3
11	2				1													3
10	5																	5
9	5					1												6
8	5						1											6
7	2					1		1	1									5
6	3					1												4
5	5	1						1	1	1	1							10
4	4	1				2		1										8
3	7	1						1			1	1	1					12
2	1					1							1	1	1	1		6
1	1										3						1	5
0									2				1				1	4
合計	46	4	1	1	1	6	1	4	4	1	5	1	3	1	1	1	2	83

<きる>　（表3）

	き	し	きい	かっ	きれ	きき	きり	きく	る	くる	φ	合計
14	7											7
13	4	1										5
12	4											4
11	3											3
10	7		1	1								9
9	5			1								6
8	2		1		1							4
7	4											4
6	4										1	5
5	2		3		1						2	8
4	3		2			1						6
3	6		2				1				1	10
2	1							1	1		2	5
1	1				1				1		3	6
0	1									1	2	4
合計	54	1	9	2	3	1	1	1	2	1	11	86

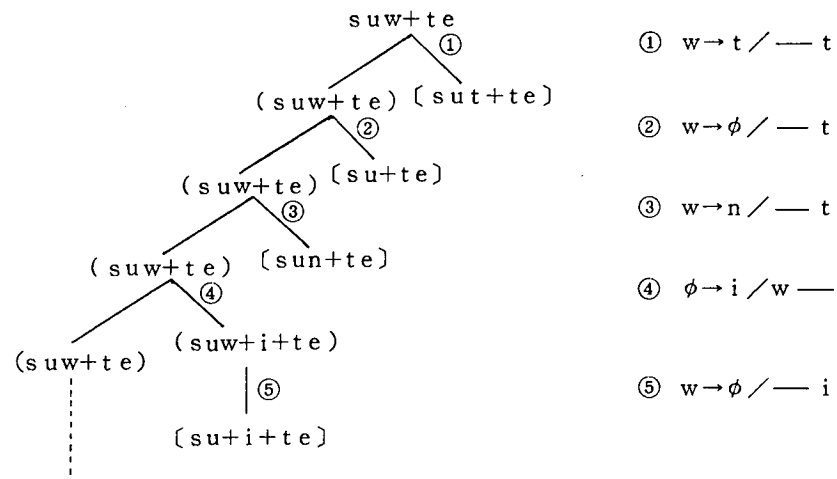
＜ふる＞　　（表４）

	ふ	ふい	ふり	ふる	ふれ	ふう	ふき	ふるい	へる	φ	合計
14											0
13											0
12											0
11	1	1									2
10			1	1							2
9	1										1
8	1	1	2		1						5
7	1					1					2
6		1									1
5		1	3	1						2	7
4	1		2	3							6
3	3	1	3							2	9
2	1		3				1			1	6
1			1							5	6
0								1	1	2	4
合計	9	5	15	5	1	1	1	1	1	12	51

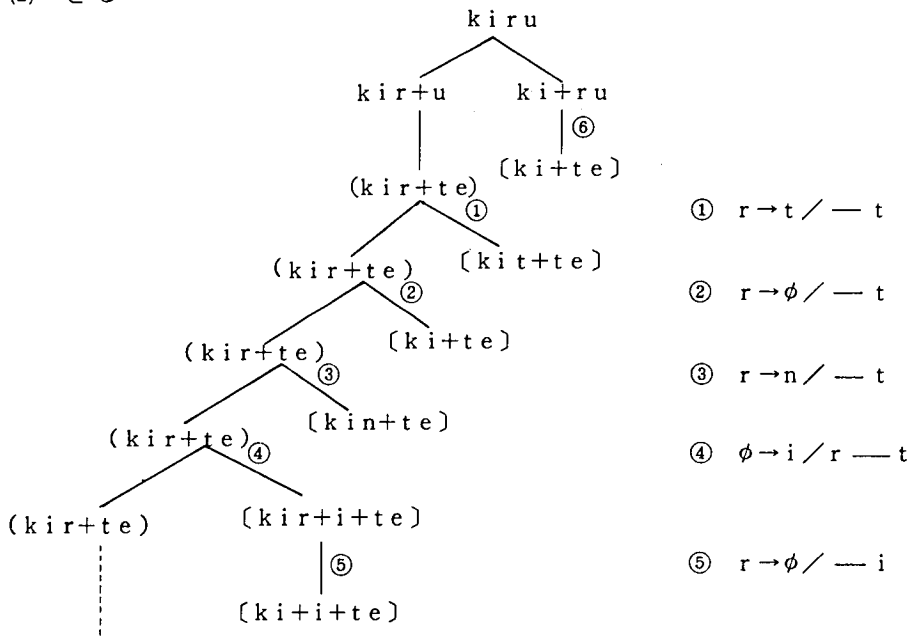
（表２）～（表４）から明らかなように，高得点者から低得点者に降りていくに従って誤答の種類が増えており，しかも音韻規則では理解出来ないような誤答が現れてきている。また，一口に促音便と言っても全てが同じパターンの誤答を示しているわけではなく，個々の誤用パターンの全体にしめる割合も異なっている。

次に，(1)～(3)の枝分かれ図をみてみよう。これはおもな音韻変化規則を表したものである。（但し，○内に示した数字は便宜的につけたものであり，音韻規則が適用される順位を示したものではない。）

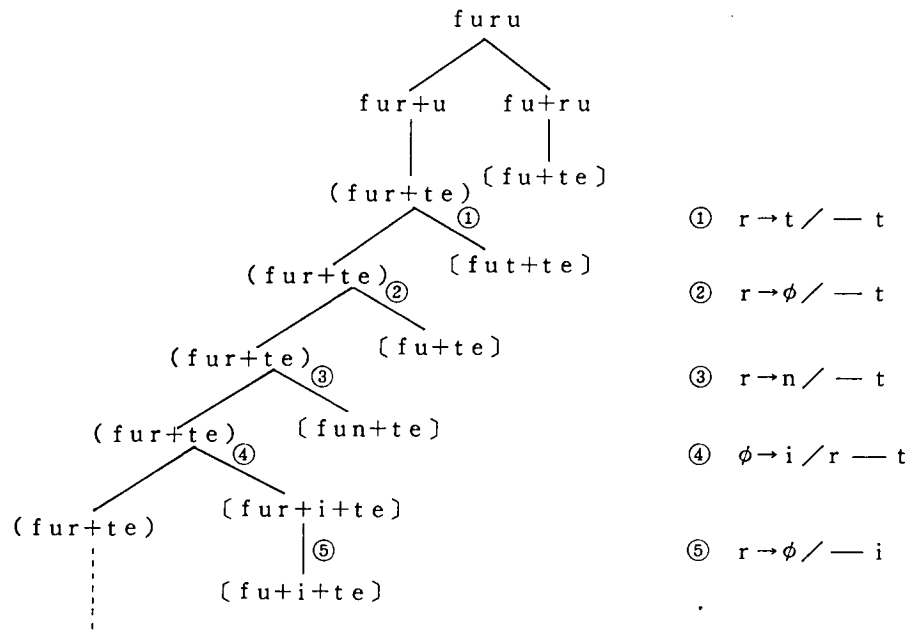
(1)　すう



(2) きる



(3) ふる



それぞれの枝分かれ図の①～⑤の音韻規則（①促音化②語幹子音脱落③撥音化④母音挿入⑤イ音化－なお本稿では，⑤の規則は④の規則のあとで適用されるものと考える－）及び(2)，(3)の音韻規則⑥のうち，①の促音化規則を選択するのがここではもちろん正しいのであるが，実際の解答例としては他の規則の適用による誤答も現れてい

る。但し，誤答に関して言えば，動詞によって優先的に選択されている規則に違いが見られる。解答数によって適用優先順位を表すと次のようになる。

(1) すう　①＞（④→）⑤＞　③＞　②

(2) きる　①＞　②，⑥＞（④→）⑤＞　④

(3) ふる　①＞　④＞　②，⑥＞（④→）⑤

なお，②と⑥の規則からは同一の語形が現れるが，今回の資料からはどちらの規則の適用によって語形が決定されたかは判定できないため，両者に可能性があることのみ指摘しておくことにする。

(表２）～（表４）及び(1)～(3)から次のことが言える。

a．＜すう＞＜きる＞に比べ，＜ふる＞では上級レベルにおいて誤答があまり現れていない。

b．語幹がｒの－ｒ動詞＜きる＞＜ふる＞には現れないが，－ｗ動詞＜すう＞には音韻規則③の適用によって撥音化した語形〔ｓｕｎ＋ｔｅ〕が僅かながら見られる。

c．語幹末子音の後にｉが挿入され語幹末子音が脱落した語形（音韻規則④，⑤の適用），すなわちイ音化した語形について－ｒ動詞では〔ｋｉ＋ｉ＋ｔｅ〕3.3％（９例），〔ｆｕ＋ｉ＋ｔｅ〕1.8％（５例）と出現率が低いのに対して，－ｗ動詞では〔ｓｕ＋ｉ＋ｔｅ〕17.0％（46例）と出現率が高い。

d．－ｒ動詞では，語幹末子音ｒの脱落した語形が現れているが，語幹末子音ｒの前がｉである＜きる＞から派生した〔ｋｉ＋ｔｅ〕19.9％（54例）の方が，ｒの前がｕである＜ふる＞から派生した〔ｆｕ＋ｔｅ〕3.3％（９例）よりも圧倒的に出現率が高い。これは音韻規則⑥が適用された可能性を強く示唆しているものと考えられる。

e．語幹末子音ｒとｔの間に母音ｉが挿入された語形（音韻規則④の適用）についても，＜きる＞と＜ふる＞の間で出現率に差が見られる。：〔ｋｉｒ＋ｉ＋ｔｅ〕0.4％（１例），〔ｆｕｒ＋ｉ＋ｔｅ〕5.5％（15例）

2.2　イ音便

前節と同じくこの節においても，はじめに＜かく＞＜ぬぐ＞の誤答例を受験者の得点に応じて表にし，そのおもな音韻変化を枝分かれ図に表してみる。（①～⑤の音韻規則は2.1に同じ）

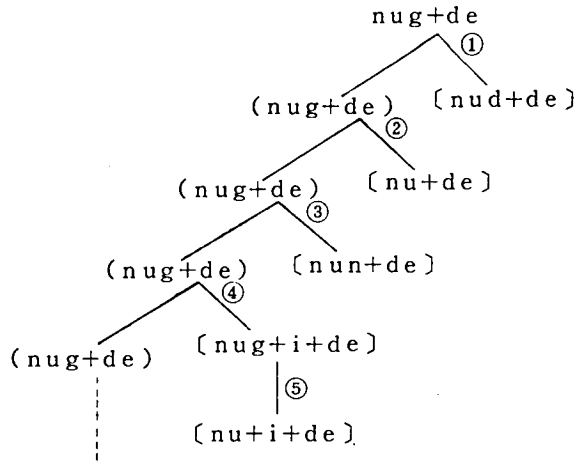
＜ぬぐ＞ （表５）

	ぬん	ぬぎ	めい	ぬぐ	ぬぐっ	ぬ	ぬっ	めっ	ぬが	ぬごん	ぬぐい	ぐ	ぬげ	ねいて	ぬず	く	φ	合計
14																		0
13	2																	2
12		1	1															2
11	1																	1
10	2																	2
9				1	1													2
8	6	1				1												8
7	1				1		1	1	1									5
6	2					1	1			1							1	6
5	3	1		1		1					1						1	8
4	3	2					1											6
3	2	1		1		3	2					1					1	11
2							1					1	1	1	1		1	6
1	1	1				1										1	2	6
0		2															2	4
合計	23	9	1	3	2	7	6	1	1	1	1	2	1	1	1	1	8	69

＜かく＞ （表６）

	かっ	かいてき	かき	かきかっ	き	かけ	なった	か	かくん	かく	φ	合計
14	1											1
13												0
12	2											2
11	2											2
10												0
9		1										1
8	1		1									2
7	2			1								3
6	3		1		1	1	1					7
5	1							1	1			3
4	3		2					1				6
3	4		2					1		2	2	11
2	1		3					1			1	6
1	1							1			4	6
0			1								3	4
合計	21	1	10	1	1	1	1	5	1	2	10	54

(4)　ぬぐ



① g→d／—d

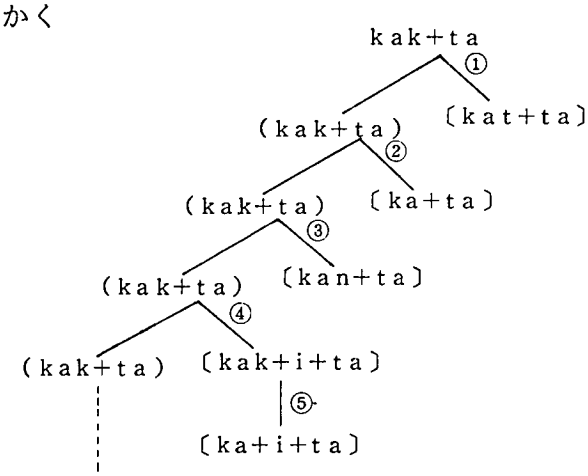
② g→φ／—d

③ g→n／—d

④ φ→i／g—d

⑤ g→φ／—i

(5)　かく



① k→t／—t

② k→φ／—t

③ k→n／—t

④ φ→i／k—t

⑤ k→φ／—i

枝分かれ図(4)，(5)における音韻規則①～⑤の適用優先順位を表すと次のようになる。

(4)　ぬぐ　　(④→) ⑤＞　③＞　④＞　②＞　①

(5)　かく　　(④→) ⑤＞　①＞　④＞　②

両者には規則③の適用の有無及び規則①が適用された順位に差が見られる。

(表５),(表６)及び(4)，(5)から次のことが明らかとなった。

a．イ音化せずに誤って撥音化した語形（音韻規則③の適用）が，＜ぬぐ＞では23例現れるのに対して＜かく＞では１例も現れない。：〔nun＋de〕8.5％（23例），〔kan＋ta〕0％（０例）

b．語幹末子音k／gが後続子音と完全に逆行同化した語形（音韻規則①の適用），すなわち促音化した語形においても出現率に差が見られる。：〔nud＋de〕2.2％（６例），〔kat＋ta〕7.7％（21例）

c．音便化せずに，語幹末子音とｄ／ｔの間にｉが挿入された語形（音韻規則④の適用）では〔ｎｕｇ＋ｉ＋ｄｅ〕3.3％（９例），〔ｋａｋ＋ｉ＋ｔａ〕3.7％（10例）とほぼ同程度の誤答を示す。

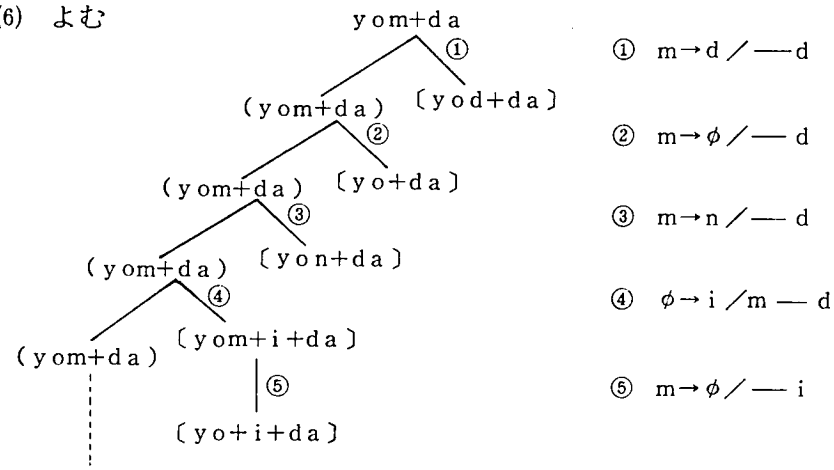
2.3　撥音便

撥音便については，－ｍ動詞＜よむ＞１例しか誤答例を集めることが出来なかった関係上，詳細な分析は今後に譲るとして，以下（表７）と枝分かれ図(6)からわかったことを記し，併せて他の音便形との比較を試みたい。（音韻規則①～⑤は2.1，2.2に同じ）

＜よむ＞　　（表７）

	よっ	よむたっ	よむ	よ	よんっ	よみ	よあ	よき	φ	合計
14	1									1
13										0
12	1									1
11										0
10		1								1
9										0
8										0
7			1							1
6			1							1
5				1						1
4					1	1				2
3			3			1			2	6
2				1		1	1	1	1	5
1				1		1			3	5
0						2			2	4
合計	2	1	5	3	1	6	1	1	8	28

(6)　よむ



枝分かれ図(6)における音韻規則の適用優先順位は次のとおりである。

(6) よむ　　③＞ ④＞ ②＞ ①

(表7) 及び(6)から次のことがわかる。

a．誤答率（白紙解答は除く）が，他の音便形をとる動詞に比べて低い。：
＜よむ＞7.4％（20例），＜すう＞29.9％（81例），＜きる＞27.7％（75例），
＜ふる＞14.4％（39例），＜ぬぐ＞22.5％（61例），＜かく＞16.2％（44例）

b．語幹末子音の後にｉが挿入され語幹末子音が脱落した語形（音韻規則（④→）⑤の適用），すなわちイ音化した語形〔ｙｏ＋ｉ＋ｄａ〕が1例も現れていない。

2.4　まとめ

以上のことから，日本語を学ぶ外国人学習者が音便形の問題で犯す誤りの傾向を次のように指摘できる。

(1) 中間言語としての日本語において動詞を活用させる場合，それぞれの動詞で傾向は違うものの，ある一定のoptional ruleの適用によって誤答が現れている。

(2) 上級レベルから初級レベルにいくに従い誤答の種類が増えている。また，低得点者ほど音韻規則では理解できないような誤答が現れている。

(3) －ｒ動詞では，一段活用動詞との混同から誤って分節したと思われる語形の派生形が現れる。これは特に－ｉｒｕ形のときに顕著である。

(4) ＜きる＞（切る）や＜かく＞のように，他の動詞の連用形に似たような語形が存在する動詞は，その当該箇所で誤答が頻出する。[3]

（注）

1. 上原麻子・難波康治『外国人留学生の日本語能力測定に関する基礎的研究』広島大学教育学部紀要第2部，1988年，pp. 289－299

2. なお本稿で扱った資料では，音便形の後に付される「て／で，た／だ」が既に与えられているため，順行同化と逆行同化との間の関係は扱えなかった。今後の調査では「て／で，た／だ」を含めた資料を用いる必要があろう。

3. eg. 切る→切って〔ｋｉｔｔｅ〕，着る→着て，来る→来て〔ｋｉｔｅ〕
書く→書いた〔ｋａｉｔａ〕，買う→買った〔ｋａｔｔａ〕